

あの日の指輪を待つきみへ (CLOSING THE RING)

2008(平成20)年8月9日鑑賞<テアトル梅田>

★★★



監督・製作＝リチャード・アッテンボロー／脚本＝ピーター・ウッドワード／出演＝シャーリー・マクレーン／クリストファー・プラマー／ミーシャ・バートン／ピート・ポスルスウェイト／ブレンダ・フリッカー／ネーヴ・キャンベル／グレゴリー・スミス／スティーヴン・アメル／デヴィッド・アルベイ／マーティン・マックラン（松竹配給／2007年イギリス、カナダ、アメリカ映画／118分）

……事実は小説よりも奇なり。この映画の脚本は、そんな格言（？）を地でいったもの……。エセル・アンの名前が刻まれたアメリカ軍兵士の指輪が、北アイルランドのベルファストの丘で発見！ さて、この指輪が紡ぐ50年前の物語とは？ また、アイルランドとアメリカを結ぶ壮大な恋の物語とは……？ 複雑な物語の映像処理のテクニックは大いに勉強になるが、さてラブストーリーとしての感動度は……？



すべては1人の脚本家の発想から

この映画が生まれたのは、1956年イギリスのロンドン生まれでアメリカ在住の俳優兼脚本家のピーター・ウッドワードが書いた脚本から。すなわち、彼が書いた、半世紀を繋ぎかつアメリカのミシガン州ブラナガンとアイルランドのベルファストの丘を結ぶ壮大なラブストーリーの脚本に、リチャード・アッテンボロー監督が強い興味を示したため。

また、ピーター・ウッドワードがそんな脚本を書く創作意欲をかき立てられたのは、今から数年前にアイルランドのラジオで流されたあるニュースを聞いたため。それは、アイルランドのベルファストの丘で指輪が発見されたというものだが、すごいのは、その指輪は50年以上前にベルファストの丘で墜落したアメリカ軍のB17爆撃機に乗っていた航空兵の結婚指輪だったということ。この指輪は一体どんな運命の下でベルファストの丘に埋められ、またどんな事情で誰の手によって発見されたのだろうか……？ そしてまた、その指輪が発見されたことによって、どんなドラマが始まるの

だろうか……？

そんな、ホントのようなウソのような、またウソのようなホントの物語がこの映画。

ベルファストの丘で、何を掘り返しているの？

この映画には冒頭、アイルランドのベルファストにあるベルファストの丘で土を掘り返している男クインラン（ピート・ポスルスウェイト）が登場する。彼は長い間ずっと1人でこんなコトをやっているらしいが、それは一体ナゼ……？

そんな彼に興味を示し丘に登ってきたのが、地元に住む初老の女性エレノア（ブレンダ・フリッカー）の孫であるジミー（マーティン・マッキャン）。何の屈託もなく無邪気に丘で土を掘り返している理由を尋ね、その協力を申し出る青年ジミーに対し、最初は極端な警戒心を示していたクインランも次第に打ち解け、以降掘り返しは2人の共同作業となっていくことに。

ところで、クインランがそこで掘り出そうとしていたものは一体ナニ……？ また、後から参加したジミーがビギナーズラック的に掘り当てた「テディ アンド アン」と刻まれた指輪の持つ意味は……？

50年の時間差と二大陸の距離差をどう表現？

現実起きたニュースを素材として書かれた脚本は、1941年と1991年という50年もの時間差がある2つの物語が同時進行するうえ、舞台もアイルランドのベルファストとアメリカのブラナガンにまたがるもの。したがって、それを映像にするには映画特有のさまざまなテクニックが必要になるが、そこは1923年生まれだから85歳になるベテラン監督リチャード・アッテンボローのこと。そのお手並みをスクリーンでじっくり拝見したい。

まず、50年も異なる2つの時代を描くとなると、俳優を二重に起用しなければならないのは当然。そこで、この映画で最も大切なヒロイン、アン（シャーリー・マクレーン）の若き日をミーシャ・バートンが演じたが、夫チャックの葬儀の日もどこか淡々としているアンの話し相手となっている初老の男ジャック（クリストファー・プラマー）の若き日を演じたのは……？ また、ベルファストの丘で土を掘り返しているクインランや、ジミーの祖母エレノアの若き日を演じたのは……？

他方、小説（脚本）も2つの時代と2つの舞台を瞬時に切り替えるのは得意だが、

映画でもそれは十分可能。鳴っている受話器を取りあげたら突然それが50年前の時代になっていたり、ドアが開いたらそこに立つ人が突然50年前の若い姿になっていたり、と映像の処理はまさに自由自在。これを多用するのは禁じ手なのかもしれないが、リチャード・アッテンボロー監督はあえてそれを多用。したがって、観客は最初戸惑うかもしれないが、中盤からはそれにも馴れ、あの時代かこの時代か、あっちの舞台かこっちの舞台かを瞬時に理解しながらストーリー展開を楽しむことができるはず……。



こんな男3人の友情ってあり？

1941年アメリカ。ヨーロッパにおけるナチスの台頭にもかかわらず、それまで「栄光ある孤立」を守ってきたアメリカが、いよいよヨーロッパで燃え盛る戦火の応援のため参戦しなければならなくなっていた時代だ。そんな時代状況の中、祖国への忠誠心に燃える3人の若者テディ（スティーヴン・アメル）とジャック（グレゴリー・スミス）、チャック（デヴィッド・アルペイ）がいた。またその中心には憧れの美女アンが。アンが恋したのは、航空学校に通うために田舎からこのまちにやって来たテディ。そして、やさしくて真面目なチャックも、恋愛に不自由したことの無い遊び人だが魅力的なジャックもアンに恋していたが、それを押し殺して2人の恋を応援した。

その結果、召集直前に実現したことが2つ。その1つは、テディがアンのために建てた家の中で、テディ、ジャック、チャックの3人で交わした男の約束。それは、自分が戦死したらどちらかがアンの面倒を見てほしいというテディの申し出に対して、ジャックが辞退した結果、チャックがそれを引き受けたもの。以降この映画のストーリーはこの3人の男の約束をベースとして展開していくことになる。この映画の脚本はたしかによくできているが、私はこの3人の男の約束には少し違和感が……。

もう1つ実現したのが、教会でのテディとアンの結婚式。しかしその出席者はジャックとチャックの2人だけだし、神父も資格のない見習いの友人が務めたから法的には無効……？ しかも、突然の思いつきだったから交換する指輪もなく、テディがアンに与えた婚約指輪のみ。アンが「テディ アンド アン」と刻したその指輪を、テディはしっかり指にはめて戦地に旅立つことに。

若き日の3人の男たちの友情が、テディとアンの恋をめぐるこんな約束として実を結んだわけだが、ホントにこんな友情ってあり……？ また、戦争にはハプニング

がつきものだから、どんな形でそんな男の約束の履行が求められていくことに……？

娘は1人カヤの外……？

アンには一人娘マリー（ネーヴ・キャンベル）がいた。父親のチャックに溺愛されて育ったマリーは今、父親を失って悲しみでいっぱい。しかし、母親のアンはそれほどでもなさそうだから、マリーは1人イライラ。そんなマリーに対して、アンは「私の人生は21歳の時に終わった。今さら何を嘆くの？」と言い放ったから、マリーは両親の親友であるジャックに対して「一体何があったの？」と問いたしたが、ジャックは「過去を掘り返すな」と答えるだけ。

こんな風に何かワケあり気に、母親からもジャックからも沈黙を通されると、逆に気になるのが人情というものだ。もちろん、これがリチャード・アッテンボロー監督の狙いなのだが、これによって、つい私たちもマリーと共にその秘密を探りたいと願うことに。こんな風に映画は、アイルランドのベルファストの丘でのクインランとジミーたちの行動と、アメリカのブラナガンでのチャックの葬儀の様子を提示することによってまず状況設定を明らかにし、そのうえで時代を50年前にさかのぼらせていく。

時は1941年、場所はアメリカ。そこには前述の若く美しいアンとそれを取り巻くテディ、ジャック、チャック3人の若者たちがいた。そして戦争。テディ、ジャック、チャックたちは今アイルランドのベルファストに赴任していた。そして、いつも同じ行動をとっていたジャックが足を負傷したため、今日はテディだけを乗せたB17が悪天候の中を飛行中、ベルファストの丘に墜落することに。さて、この報告をアンに届けなければならないジャックとチャックがその後とるべき行動は……？

IRAとは？ アイルランド闘争とは？

08年8月8日の北京オリンピック開幕に合わせたかのように起きた、グルジアの南オセチアをめぐるロシアとグルジアとの軍事衝突は、米露双方の「罵り合い」の中で激化しているが、平和ボケした日本人はこのような国際紛争にはとんと弱い。

それと同じように、この映画には第2次世界大戦が終了した1945年以降に発生した、アイルランドにおけるプロテスタントとカトリックの宗教対立、そしてアイルランド共和国のイギリスからの独立問題に端を発したIRA（Irish Republic Army。イギリスからの離脱とアイルランド共和国への統合を唱えたカトリック系の武装集団）

の武装闘争の様子が描かれる。しかし、日本人は「それってナニ？」と思うのが大半だろう。

したがって、ベルファストの丘で土を掘り返しているクインランとジミーを見張っている不気味な男キャハルの人物像は、なかなか理解できないはず。映画の中では、現実にジミーがキャハルら IRA の組織に監禁されて、スパイになることを強要されたり、アンがベルファストを訪れた時、目の前で爆弾テロが起きたりするから、IRA 問題は他人ゴトではないのだが、この映画の中にそんな難しい現実の政治問題を取り込む必要があったのかどうかは私には少し疑問。映画の中でも十分消化しきれていない感があるうえ、少なくとも日本人向けにはそんな背景事情を一切無視しても、指輪をめぐる50年と二大陸を紡ぐ物語は十分成立したのでは……？

ジミーの世話好きから、二大陸が結ばれることに……

ある日ジミーが掘り当てた指輪にクインランはビックリしたが、クインランからジミーに対してそれ以上の説明はなし。そこで、何ゴトにも興味津々のジミーは、指輪に掘られた「テディ アンド アン」を手がかりに、いろいろ調べていったらしい。その結果、チャックを失った悲しみ(?)の中、1人生きる屍のような状態で、家の中に引きこもっているアンの下にアイルランドのジミーから電話がかかってくることに。B17の墜落によってベルファストの丘に埋もれていたあの指輪の存在が50年ぶりに明らかになり、しかもその指輪が本来の持ち主であるアンの元に戻ってくる環境が整ったわけだ。しかし、今さらそれにどんな意味があるの……？ 指輪をアイルランドからアメリカのアンの元に送り返したからといって、何がどう変わるの……？ それだが、この映画の最大のテーマ。

全くワケがわからなかったマリーは、母親のアンが愛した男は自分の父親チャックではなく、50年前に死亡したテディだったと知ったら、どんなショックを受けるの……？ そんな心配をよそに、アンは自宅のある部屋の壁を解体することをジャックに要請した。コトの成り行きを心配するジャックの反対にもかかわらず、50年間封印されていた壁を取り壊すと、そこに現れてきたのは50年前のアンやテディ、ジャック、チャックたちの姿そのもの。テディの墜落死を受けて、アンとジャックとチャックがこの壁の中に封印していたあの50年前の姿がすべて現れてくることになったわけだ。

こんな事態になったのは、すべてアイルランドのベルファストからアメリカのブラ

ナガンまでやって来たジミーの世話好きのおかげ。さて、映画はこの後さらにどんな展開を見せ、そしてどんな結末を迎えるのだろうか……？ 50年という時間の経過と二大陸を結ぶ恋の結末は、しっかりとあなた自身の目で……。

老いるの恋はありうるの？

最後に3人の男についての私の感想を少し述べておきたい。第1に、アンとの恋だけに生涯生きると宣言したテディは、アイルランドに赴任してもそこで出会った魅力的な女性エレノアに全然興味を示さなかったようだが、ホントにそんな男っているの……？

第2に、アンに対する恋心はテディと同じだが、テディに遠慮し、友情を大切にしているチャックは、テディの死亡後3人の間で交わした男の約束にどう向き合うのか微妙。この映画はチャックが死亡したところから始まるから、チャックの揺れ動く心の中は描かれないが、チャックのような役割を果たせる男ってホントにいるの……？

第3は、あの約束の際もうまくその責任をチャックに押しつけたジャック。自他共にプレイボーイと認めるジャックは、アイルランドではエレノアといい仲(?)になったようだし、戦争が終わってからも妻を2度、3度かえたらしい……？ そんなジャックは、チャックが死亡した今やっとな、アンに対して若い頃からずっと持ち続けていた恋心を披瀝するの……？

日本人の平均寿命は男性78.7歳、女性85.7歳となっており、老いるの恋を描いた映画は『死に花』(04年)や『ヴィーナス』(06年)など、最近増えている。すると、50年前の封印されていた事実が今すべて明らかとなり、マリーもそんな現実を受け入れた今、ひょっとしてアンとジャックの老いるの恋はありうるの……？

2008(平成20)年8月12日記